燕石十種 たらしば

六輯

六

イ哲A
679
59

679
59

燕石十種第六輯 巻六

常夢葉の序

原武太史八宝永の頃より三絃を以て唱ふる人之あるを聞の果樓
かて三絃の吉常ふ習りたるを聞て海嘯ありとさとりたるを人々
枝葉ふよりて妙ありまを感ぜ〳〵とそ世書を行りが請ふよりて自筆
してなくてる写なりと〳〵と鯉表ぬ〳〵が持来りたるを購ひ得て例の
十種中ふ収めおく〳〵

文久癸亥初冬

活東子識

浄瑠理　三絃根元
半左衛門　操座始初名代
自筆にて巻き　名面

一 久世氏　一 加茂氏　一 荒井氏
一 親世氏　彩九郎　一 佐々木市蔵　一 十寸見治別
一 山崎源四郎　一 勝原氏女　一 市村羽左衛門
一 尾上菊五郎

小野のお清といふ織田家の侍女より信長落去の後流れ乃多摩川の畔の
茅の根に縋り付て居たり為に大岡秀吉公の簾中に由を告げ
めされてひそかに此家に此踊を教ふ故に大岡清吉と名のりふ
作り物語せしと也後に御通かしらるる夫婦源宗の門にかくれ養ひ
らるる又糸竹の名人もありし夫婦源宗の門にかくれ養ひ
こまかに成りて世ふやさしくぞ成りける也曹司牛若若衆別て向の
形柄彼の長ぐりとふ一下夜前りの浄瑠理姫の琴を弾じ言にいうまで
姫のりと思ひ出せの事ども筆に揚り始まる姫り源氏十二段といふ物
作りて上覧ふ入まる大岡是を也覧ぶ筆紙文法伊勢物語作り
と感じ給せの山中の城を命じて宮紙格校ふ書翰を付て世の書紙
是を沢角滝野吉検校ふ作る由師八年由是是に成る又三絃に
滝して浄瑠璃ふ合て一曲と成是三絃ふ此を初めり然中間乃ぶ
春日神社石巻法座を作るとあり以合せるいさかを加へ今世

ほうをゆひとそをそ改こん屋長十郎といふ者ありて（京都東洞院目黄屋滝姫長十郎の事）
指校ふし曲を作人妙音を切やどる人々斉也と云自ら都めぐりとうふ曲を
作りとなん云ふ六字南無右衛門といふ妓女行家ふか作人なん住家ふか
ある〳〵初メて浄瑠璃十二段を語りて半蔵の耳を驚うん支より世加鄙
一流ふりてそ中日を積る日を重ねるものそふりの一事に感りるにより
南無右衛門又八語を鍛るとの荒増を作りこれるかの十二段乃浄瑠璃義
をうつる〳〵語りなんいたり初語りふ吉義を流るを浄瑠璃と号〳〵て
を名世ふ方多初〳〵て後滝野弦作ふ法久て京武ふ作る滝野勤の弟ふ
吉郎高郎ふも交りを作るが中ふ杉ふ七郎九郎と云町人滝野の妙世ふ
なんぎ〳〵深〳〵至て師弟ありり妓義を学人得て京都の一風と成又小平太
といふ者滝野の弟ふして京都より来りて〳〵七郎九郎の助音を語る
是より関のひんぐ〳〵ふ行及初〳〵ひろ行る色ハ清音といふ人ハ段も
の久世を行ふ七郎九郎小平太是ふ義を分てかゝる又平太西の宮の

傀儡師ふ為りて初メて操といふ者を立て〳〵人形ふ合て興行す七郎
と京〳〵丹後掾と更願て小平太ハ薩摩の掾とをとうや

祢ふ七郎九郎事　丹後掾　伊予助　肥前掾

大内源右衛門　淡田半左衛門
近江太夫　半平太
次郎右衛門

丹後掾弟子　長門太夫

弟子ハ薩摩と成る　薩摩掾

弟子ハ長崎弟子　半左衛門

弟子　虎平助
同　清又郎
清又郎弟子　多源市左衛門
世ふ多源義と云ハ代市左衛門事也
同　小太夫

丹後掾事　丹後掾　和泉太夫

三郎兵衛

丹後掾従
虎屋源左衛門

長門守従四位下小左衛門尉
外記左衛門

近江守従五位下
諸兵

長門守従五位下虎屋助兵衛
左佐左衛門

従
大源左衛門

源次郎

尤円
入道して後細川藤孝

宮円

近江市九郎

自休円

円通左衛門
後義昭公に仕

虎屋助

小源左衛門

尤平左衛門

平左衛門

半次郎
近江石柳に

丸市九左衛門

永休円

万左衛門
後慶長式部左衛門に改一流と家

小左衛門

左衛門

清文郎
かきの友以事しる

従左衛門入道して
虎屋永閑

長門守従五位下
肥前掾

肥前守従五位下
近江半左衛門
竹苗坂中入道して梁雲

左衛門
源左衛門

左助
こゝに左助素人なれども
上手と世に知る

左円

長門守従五位下
肥前左衛門

初左衛門

左円

竹円助
後源左衛門

宮円
早世

左左衛門

初左衛門

半次郎
後半左衛門

半円
右半と巫八元祖師匠
高上手と世に知る

文円次郎

半三郎　後入道して梁雲

忠右衛門　早世

意教　後席法

元祖河東　本苗河越氏十郎

河丈　左右馬事之

夕丈　後松浦家に召出され海軍奉行と改名

蘭別

右三丁目法号芳庵芳次郎素人なれとも文学の

右河東意教忠右衛門同門のおとうとなるなり河東は小田原町ふ住

天満宮芳左衛門その奥殿者の子に芳十郎とていひ〜本苗は河越氏といひ

双笠　江戸名主　ひろもの次右衛門

初河東門弟後一流と称

河芳とよびしを堺町に住居といひしなり〜ふ芳の字をひろ〜と

書改め光〜より河東と改めり

半左衛門　操座流れ初名代

一　源氏十二段　二段目　小六げんみ初語

三段目　笛の段　月　星の調

江戸名主　そうみの段

入段目　きつけの段

入段目　清盛

一　生駒貝　三段目　乃丸

一　接物　三段目　乃丸

一　弁慶　三段目　乃丸

一　弓場意恨　三段目　乃丸

一　和泉が城　二段目　てうもん

一　日蓮記　三段目　心入の段　初段　霊宝の段

一　丹波与佐　久段目　乃丸　三段目　紀陸文の段　久段目　教化の段　三段目　おせん乃丸　月　勝頼入分の段　月　後の初ろひ

三段目 おせん茶屋

一 濃茶かるびら豆小袖　　入段目 馬くらの段

一 夜明遠目笠の門　　三段目 初桜茶屋の段　　口段目 さらし賣

一 女房別　　三段目 祇の茶屋の段　　二段目 夏のてう　　三段目 大和ろかや屋の段　　入段目 京ろくろ屋

一 糸會和曽我　　初段 祐成角力相撲　　三段目 大和相撲　　入段目 忍ひ出せ氏

一 お新ゆゝ殺　　三段目 虎お將茶屋の段　　入段目 髮撫

一 ゆゝの意恨敵ゝ僧　　三段目 花ろう　　入段目 濃草八家

初段 おせん採　　三段目 茶屋の段　　分り 鰐の段

一 出世盛久

一 平安城都宮

一 金盛桜うげ

後弩り名代

花の投盃ト出ス

一 かけ清雷同若　　三段目 茶屋の段

一 聖代時津風　　初段 かゝいの段　　口段目 清貫茶屋の段　　入段目 小しちり茶屋の段

二段目 對面初東こ段　　分り かつこの段

矢切みこりいこき　　入段目 十界の宮相撲

三段目 法正覚茶屋の段　　入段目 仏教の段

初段 草花茶屋　　三段目 天王寺

入段目 みこかの茶屋の段　　口段目 楊姫茶屋の段

三段目 清云いのり

六段目 紅葉のまし

三段目 茶屋の段　　三段目 名工仮心　　分り 鬼瓦の段

二段目 清貫茶屋の段　　分り 釘抜の段

入段目 小しちり茶屋の段

後撰り名代

恋と情ハ清士の舞火
仇と恨ハ三ッの鉄婦火

一 會合源氏いろあらそ　初段 十二段

蟬丸りみちがらこのさ　三段目 笛の段　四段目 雅おとこ

一 神力小猴浜年多り

女郎名さいりん　三段目 志ゝぶ屋行
初段 名級の巻

一 禁中綴り合

一 雲若丸神上大

一 古今七人男

一 忠信家古屋

一 京橋中橋お涙んが屋に風流嬢ざこ〳〵

関東小六きんみ和語

七夕まつり　三段目 花いらき
三段目 木号の花子
三段目 足木ゝり
六段目 金心知ゝり

きぢん採　三段目
三段目 ゝ多の巻屋行
三段目 ゝ多の段

父母屋行　五段目
五段目 巴心吹屋行
四段目 牛若多ゝ姫屋行

一 虎がりだ
が将ざゝり橋　姫入ゝ人曽我

小袖紋法ゝ　初段
元服帯引　三段目
若浦坊侠義　五段目

月 小ゝ知賣
五段目 多ゝの巻屋行

一 西行ハむゝ
白口ハ今の長かゝ　傾城旅袋

定国姫屋行　初段
白口屋行　三段目

一 吉日袖留号我

紋ゝ　初段 のゝり
月 かみもき
月 梶原いゝき

女髪ゝ　三段目
老母対面の段　四段目 行り
ゝ〳〵ゝ〳〵いゝき

一 會稽曽我　初段　高名尽くし　二段目　桃灯紋尽くし　三段目　清見八京

一 夏任せめ　三段目　高砂屋行　竹り　雨乞の段

一 好色女子助　三段目　清見八京　六段目　いなりうどんだよ

一 名ごや　かすくき屋　竹り

心意より虎や左右支ワキを勤る　三段目　左将君ひの段

一 心臓右大将いろ桜　六段目　殿さまの宮参　二段目　三宝屋行

ワキ虎や左右支勤る

一 和国英人奇ひろそひ　小袖揃紙　天物ぞろひ

ワキ虎や左右支勤る　三段目　撮舞の段

一 かりきぢん　竹り　三宝屋行　六段目　清明行

ワキ虎や左右支勤る

一 井のかしら娘ゆり女　邪心猫まつり　三段目　公家の段

鶴かぶり日ちん

右しかり三流八焼失そ

傳授事の部

一 初段たんおり天王三宝　一切合三宝

一 登り三宝　一 ちきい三宝　一 ろんん三宝

一 ひり三宝　日蓮記せみ丸　心入三宝　右すぐき　おろぎき　合三宝口伝

習ひ事の部

一 笛の段　一 二季の鋼　一 ちろみの段

一 教化の段　一 和泉の城　一 宝りと屋行

一 日蓮記　一 せみ丸　一 ふい狭俵

一 清明行

三絃続キ由緒

丹後掾太夫方
源了弥 盲人
平九郎弟子 甚左衛門
源九郎弟子 木村又八
此者源四郎師匠之 異名を好み又りと 以前皆人呼び返りと 呼びし也
同 喜升
喜左衛門弟子 八郎兵衛

源弥弟子 天下一平左衛門
八郎兵衛弟子ニ而 山本源左衛門
又八弟子ち菊村之 山本源四郎
肥前永閑半太夫方 半太夫操座の会 狂言の唄など勤 居り後又八弟子ト 成ル

丹波和泉太夫方の三絃に権左衛門といふ者山本と銘打ち三絃を一人持せしを
其年の後源四郎相続せしめん荒木笠屋三右衛門 今平十郎祖父之事 小田原町大和屋
助九郎ともいふ者世話源四郎にきこえしとひの頃りに扇八京竹馬の浄瑠
璃の芸より新菊村と改山本と改名を源四郎八九来半太夫操座の会の
狂言の唄を勤居りし左半太夫芸荒増覚え木村又八弟子と成りり
其内よりく河東市村竹之丞座ニ而須賀城留守の言根として狂言の節に
出家松の内として浄瑠璃一派を語りし時より河東ぶしとく唄ひ只今の如

く其後出る新浄瑠璃も自分面白く河東ハ半太夫節を好く覚へし
上自分の芸自ハ外流式部節 新と云ふ半太夫之事 式部節 祖父広瀬式部大夫之事 其芸を好て之を合せ
る迄へ半太夫好しとかし遠くハ桜木もさこ迄とも古代の半太夫節を修行ふ
かしも習ふ事なし然るに近世の芸者の内にも半太夫節の事覚へしして
遠くよりも有り之中ゝも合点なし遠くより行ひ修行不知の者あり
源四郎も新しく式部節をひき出され新上る事も自付に式部の節合せ候へ共有り
古代の事を知く付ハ又八より習ひ来し出古代の声合せて候り遠ひ節くりしぶ
得と稽古せしてたと申しし覚え之にて候り遠ひと覚へしハなけれかし九之字りハ
何れとても操を取らく錦上花わや語りハ能太夫ののぶみむらしいふ泰盤粗
聞し候る近世操を勤し大夫三絃人形の好を近比迄も覚へておりしをかりの
好し事好き要とあるべく能太夫の能を不知して小歌の方をこそ好みしが先祖
の半太夫ハ肥前太夫弟子にて肥前永閑を扣らげて語りしをのる事ハ太夫
三絃も肥前永閑節のひき方不覚してハ半太夫節を知らく只今云河東一統も

東吉丈芸を和らげ綴りしものなれば東吉丈古代のまゝなりとも見るべくハ
河東節を心くし其云かりし事ハ前に云し竹添九段にたよりて肥前永閑東吉丈
古代の人形操の一術を習ひたびし操ハ出合人形の如く御座んなく六字清小山三
門三清介にあるをもし古東吉丈意教左門などありて勘平弥兵と号
きちきとて元文来不勝にして其の器と不為老年隠逸絶斗を斗り元文
元辰の八月十五夜不待せし三絃弟子なる文五郎に譲り遺る三絃浄瑠
璃并唄のすりに一時に焼捨て後三絃三味の静なるを楽とせしに家料年々に
習せし事をいろみても人々一章一句を送りて三絃共も焼捨並し棒よ
ちりぬりしハ世にあるかの鳴呼古代の達人秘の如くまで残らず志て江戸操の
正しき格式を志まもる人もなき世ぞなすげかりし犀(サイ)ハ角に死し虎ハ皮に死し
熊ハ膽に死し孔雀ハ羽毛に死す我ハ三味線に死せし甲斐もなくて一芸とも
なるで此かるも毛おもおしりたる身因果とやいわん命とやいわん
世の口をきみに芸ハ身のたすけといふ事もあれど

芸が身をたすけど志かも好で居る
身ハたてもせず浮名ぬらり
かく認メ書置送りしを如何して此伝えん市村羽左衛門尾上菊五郎自分
の外とある道に於ては猶ど孫しき古術なるは猶しからきと認めるも芸の
道に志深きを感じしく叶はぬ筆をとゞりしね
右書面他見無用の通宣者ハ双自筆認メ送るハ益心を寄するなれど紙露
夕陽志らしの身ながらたまたま恐れん語のかくみをりと
かき流も絃のうらみとなりし紫乃
おくし志ぬぶ恋しとも思へよ

東武吉丈
盛和帀に
行年六十八才

此一冊忌望に付此列源四郎へ
自筆にして送ス

俱舎論舞

釈迦殿が目前〳〵どのふなり得〳〵天地万法弘覧るふあらづ〳〵目ふ
〳〵どのゑと流めふ苦来だふ仏ふ前をゑ仏〳〵いまんや人間のなどか仏
ふなるぞんおもやるどのも阿弥陀どのも皆仏おやといふもどうそ
つきよ目前〳〵の事を人〳〵ふもう〳〵せんたのあきこれるおふうそへて
おやべらけふ凡夫のおもうさをバ業理斗りて一下事あるべ〳〵どのもいひ
あそらん大きるうそよわかうそようををたるどバ仏ふやせるひそをや
又ゑせよ方後のうそハ皆〳〵後ゑうそうそへやせあや一寸先ハ闇此頃うたふも
仏ふも法のおうさをハ風のうゑ水の面うふ目前〳〵をううハせバ風ふもまふも
のりのゑ〳〵さをでうぜれゑ来世もうそふもあ〳〵べうそを三世不可得人かおうそぬ
而ふ極楽に〳〵おうり〳〵心を現世とゑさうりとなるひげうそをといふ橋がのうて
も天人のある愚痴ふ経ハ教ゑふやせねよふもあ〳〵いるどがもれバ皆悪ふうて
後ゑ〳〵いうづ〳〵者が世ふ〳〵多〳〵の人を迷ふもうゑ心とハ此うるおをいふや
らんさう〳〵さうと一筆に書たハ行基の菩薩の一下ふも所業
絵の風ふさうも〳〵流〳〵やふかゑ〳〵だが行つゑ後不動どの行〳〵法がゑふ
おんてうゑをゑうゑ〳〵だよひと思ふるゑ氣ざゑ心が行〳〵法ゑをかゑみのゑ
ゑん茶羅ふせひだゑさをゑゑんの三世よさをゑゑ行のさをうなりさうゑぬ
先の悟ゑ

両義舞　　烏舞　　天冠舞　　夏神楽

七月芝居風流踊

七月ハ陰陽合殺の月ゆえ陰気地のうにはゑりて陰陽不順ゑて変異の
月ゑをハ大風欠又穀をそこのゑうを以て安くおゑ世ふ陰陽陽気を移り
怪ゑ鉄をとゑ〳〵頭をゑ〳〵陽気をう〳〵ゑハゑうふゑ〳〵て又穀成然
人民安穏をいのうゑり元来七月芝居の踊ハ京うりをゑのたを今に
お續をゑ芝居ふハ踊ゑ〳〵大坂ハ京に習ひておうりうりて大坂ふ

ても乾大おどりといひ侍ふ
一小舞拾六番ハ表八番裏八番也一番とハ一つがひといふ文字によりて表裏
合て八番八の字ハいの字也いハ四十八字のはじめ伊勢外宮内宮のある四十
八丁あるを云ゆへを拙まひハ八乙女の舞より出るなりの也

室町

身がやりたやむろをじへとりや遠へて他の人にやる花のいろさかりの
まふけてせ

麻子

おなかりしやといちんとをまどかのおかくしてお目をげしまバめりと
なくてハおりしまね

木下

花ハおたし木末ハみえし来る春をかさなの木のりとや

三しめ

いかりなるまとも駿河ハ名不田子うちいでてあかぞりとやまを君そそミ
しるとふしおかせ

菜の露

あはれ柳の菜の露おちて渕となるなにおん身にそむかい
おりわバ世ふ行事も

香衣

水をむすべバ月もうちにやどる花をきて香衣ハしうれるなかい
のはなのを袖をぬらしひとのまねハあろふくやの

言安

言須がよひの船もどりをそらぬまい袖とうりに池ならふよ御ー月ハ
うるまともあしせうしと君のあら顔みて

竹裾

光身をやりしみとまてらバててても床よそりのとぢめあはせて竹

語ホしき眼にもねりすりの

千歳山

君子とせるをやむりのさゞれ石岩ほ生る苔の色ことふる君と
我か中よもはきじ

庚袋

我か恋のいろに出るよ人とは水はせけども志らゐくゝぶりはいとゞ
えふる川原の袋にいろ小袖行と津めどいろに出る

芭蕉葉

そのふ思へを虎娘を北辺もかよひなれ行し家ふあれどまたも花あるぞ
だせうだの露しつふりをてあらく紫しや思ひきる恋の
えし

麻毛駒

いと鳴ふゐてあるこかへの顔むまあしくゝもよしあふみまゐをととより

ゐ川るのななるもよや行その麻毛のこねゑずとも度ふそひてあじき
志よしき志るたび句の我が身や

石川

あふてりどる夜まれ花が下りの行てりとる夜まの花も紅葉も
見るこのね家は石川をふどらぬ人かふごをかけふ山に行と思まいらら
せう

津國

津の国は昔し由は中津川ゐをせきるて土りもんゐこりひで残りもちは
園紙もこのおこのそ下にとて子ゐ是はふあゐひやら行らちりとんど
ゐひやらさらとんとさしらゐひとも思ひやら行ら

上の寺

いつもよりけさ赤き鞍の音はよくふよかみの山寺は安国ちる極文加賀の
大寺じのお西端ゐめせきおしぎんでんとうつたる赤鞍の音のよき也

たゞ見てうたになりて山のなかし笠をそろさいよさてそろさいよのみて
とゞろあふてゝりゞろ

織屋

たりごのや此孫三郎がおもてにありしが牡丹唐草獅子や象紋の
柳桜竹のまがきみの桔梗に流の志ゐる白菊祇園屋台の竹の下乃浦
吹風もなつかしきさるでさゝねつ木戸あせ待人ござるぞまつ人ハ
とまひげふみいざうら門をさゝうよ

右の歌いつまでも代々のせん集のうちの玄蕃紋とりあるひハ名をとりて名
付られたるの紀なりさるに此小舞并人りつおちら遊びあひしありし延宝
年中若衆居左衛門といへる立役元来武州の歴々より出る者なりしに舞
舞妓役者となり役おもひ得たりし小舞を書ひて芝居にて舞ひ後々
小舞の左九郎と云苗字のように人々いふを後中絶して正徳年中此

ちしめ竹しみ書左衛門といへる立役此小舞をうたひわたるは此杵左衛門ハむかし
佐渡嶋氏より出しまへしよし芸者するものハ分ちしく覚悟せねしてハ不叶
事なるに今見当メし者なきハなげかはし
又いまし麻布長坂に杵屋八郎右衛門といへる者あり 元来杵屋八郎右衛門とて芝居を勤し
此者もと麻布に退き安楽の身となり居り 縁る子を郎咲得へし左尊来りて稽古し望といひ大
しに八郎右衛門も兼ねし声が唄歌得へたりしよりして君ハ諸流の津ゞたり名
ある上手をおしまし唄三絃ハ是安此女に稽古あまなる細の名のハ古今の名
人といはれし検校川検校を師として行ふ足なき身と成り唱得たるに芝居
事迄にならずては盛出せしも歌舞妓事ハ杵屋の一流ある世々に名
あるよしまかれるよといひ大かたな杵屋の一流を立直古代より
此抱とて行角唱にあらぬかひる数へたりし此冊小舞絡六番といふハ不絶師
唄三絃あらず不知してハ不付事あるに今見当し書をなし書たる藝に志深
き左思ひ立遂とて此一冊を作りたりか三絃ふ数年志をたてとこいへども

生得不肖のして手業に不器遂ふ深秘あり勤き事を升り元文元辰八月
十五夜一所懸命にて寿の字は三絃中ゆるゆる来席拍子鑑をも殘りし三絃
三丁浄瑠璃の興の如く近不殘一時ふ焼捨を後を絃を声は静かなるを楽とも
ふ所の数年三絃ふ心をなをもつて事を痛てやあるこるる京大坂長崎所々
より一章一句を送つて尤を絃ふも芸道かく捧ふもりもりは世ふ知
る所の斯古代の達人并人形の妙なるまて皆くうせく江戸掛の西しき格式も
ちまる人もあり操を勤しなまを丈三絃もかし升りのふ芸ごとき如事は
を要とまるるやはりふ能なまを丈乃能あり伊ふこそんも芸ふあるとし江戸
浄瑠璃ハ語流ともふ下流ハ古能元ふて習ひを宗流ふて系ひあり
て相ゆとせ代初能天王寺だんをり三郎けて習事武能目軍切合
三郎人形ふのをる宗流ふのをり三郎より三郎ふ入三郎ひを三郎うれい三郎
程くなひを浄瑠璃三絃人形ふ操して八流能あり かくて人形ふ能又所
能三番ん六ふ所を舞ふ吾六門三ふをして上るかを人形もりつたふ身振こるふ

人のごとくにはるふをとるこハせぞ能をふびさ能のごとくにきつとつたるひ
るりてかしのつるひるに数年ふんをとるしかし升のかりい入ちりのきをよふ
ふも程くむつかしかつるひるる扇のさしふ拍子のをを近ふ能芸ふをを
をとといくとも名を人形のよるふ不及今人形をいふ三宅人名付き人のをを
くやくにをるふまひにおりひいるる名人之又奇特妙の不能師といるをめつた
ふうんぶりをるひるりをるをハ不能師といいたぶ皆おとり師之不能師といふ
第小孫を所市川右国義近くハ古市村明九郎くしかハ皆ふ踊師之いふと
いるる右指六番切ふて身のかくふ実面テのきるをふ扇の持ようつひふ拍子の
踊をふ一所のかくふ実とるる焼くく不能ふるふ右の小事も不見強くの
きをふまるを身のをを右ふ伊をくをんぶりをるるをを振り袖ふる
るぶ伊をるをを伊も右くねるがかりるふいるくせをて さを能まる
こをくを不能師と見くハ笑をを不見能を云人形の人ひどくにるぶ
をとるといるおるく又迎世の所も皆三りと芸居あるとの能や伊拍昌

なる場合にハ三かりの調子を嫌ひある事也。いかんといふに本調子二上りと
違ひ、三かりハ根ぞらむ吟ふしてこんなるハ猫なとの類皆々此類ひ
三かりの芝居なと[illegible]なる場合にハ古来本調子二上りを以て是をうつせり
先年上方より坂田平四郎といふ者かり菓子並石儀にうつさせて云ちんといふ
かし計りの小歌を謡ひし事をね先生といふすし岳四郎弟に出合ひ
なからハ松島庄五郎勤めしのねかりを岳四郎うつひし歌舞妓役者
とても古代ハ不及なかくも能のかたを学びて身振ふ他をなしたるに
今のうたハおんどの拍子うたへむかしハ程よく瀧川（喜内といふ其名之）平七近ハ歌舞三絃
おとりもさ有しこんたんして。武久。志の。おこつき。とびこえ。詞つもりかひ。
まゆの。志らめ。生き死。らえひさ有し三ふむをなしおなか面白くいふまでも
なくらびまゆりし也かの石儀の身振りふかくむつかしき身振迄まで残り
咲しまも立拍子是も近世の人形の使ひ方とおなしくむりもなく（なる）
近来ふ伝へなくとんだもしまへんされば我もよと見え人ぐも不参にふ

いよし幕りて石儀といふ事ハ失ぬ又近世長歌と遊芸者もおもひて居る長うた
と云意味なるゆへなるにようて古代の役者踊などにも小うたと云節せしが長唄
といふ事ハなし長うたといふ唄しを古く仕ぎりてうつしたるにながうたと覚へ
しのおしの三かりうたを今になつき石儀にもうつしたるに長歌と覚へし也すべく
うたふすも長うたのうたひかたなり志づかに思ひとうちにみなたゞの節なる事
なるをまたやも殊しめつたに長唄と云いつなる事どもいひまみても節のなる
石薬門と見へたりこゝに近頃吉五方にてあやつりありしより上方流の人形
一ツふ四人ともとりはさその操なりしと思ひしに江戸浄瑠理のあやつりのよし
いづれも古式ふと云三味線人形使ひハ味ありとも平ハ替て不覚今とてもかく
ましき人なりと思ひおきりし　此書面紙見ん遊芸者若おし深とも不審
なからハといひしもしくもあらしきかさん
右書面市村羽左衛門親父自分して尾上松助も遊芸に志深切ふく
余にまかせ給ひのぞみとあると筆をとてかし也

先達而観生之背負して出し名面

尾上菊五郎　西川扇蔵　佐々木市蔵

市川團蔵　杵屋佐次郎　杵屋喜三郎

三絃濫觴

晋ノ阮咸世ニ不遇ツレヽノ日ヲ送ルトテ始テ作リ出セシ器也近世
全雑戯具トナリ妾童妓女ノ弄トセシヨリ自拙調ノヤウニ
成リテ淫乱ニソムナカダチノコト ニ モテキタルコソ是非モ
ナキコトゾ

右晋書阮咸傳　下略

一 ミテノ足コキウニ合

一 二ハトリゴヘ

一 桐ニ有ニハカヅ有

一 駒カエリ三下六　二弦ツノ コヘヲツヾケ三人形体ノ内事

一 弦式十二口伝

一 山寺舞之事

十二調子

正月 平調　二月 勝絶　三月 下無　四月 雙調

五月 鳧鐘　六月 黄鐘　七月 鸞鏡　八月 盤渉

九月 神仙　十月 上無　十一月 一越　十二月 断金

但十二時にあてゝ用る事ハ寅の時を平調として夫より段々に用ゆ
又四季及び月にあてゝ用る時ハ

一 雙調春也木喉ノ声　一 黄鐘夏也火歯ノ声

一 壹越土用也土牙ノ声　一 平調秋也金舌ノ声

一 盤渉冬也水唇ノ声

五臓之聲之事

肝東春木青角目双調
たゝ〳〵ハよゝぢゝ肝らををとゝる
心南夏火赤徵舌黄鐘
ふゞ〳〵ハもゝ心こををとゝる
脾中央土 用黄土宮辰呂越
あま〳〵ハうゝぢゝ脾これををとゝ
肺西秋金白商鼻平調
かゝ〳〵ハゝゝ肺これををとゝ
腎北冬水黑羽耳盤涉
たゞ〳〵ハゝゝ腎こををとゝ
又六律六呂ともいふ
六律ハ 黄鐘大蔟姑洗蕤賓夷則無射
六呂ハ 大呂應鐘南呂林鐘仲呂夾鐘

佐心流

七陌獅子由来

芝居来由乃一帖ハ城北个谷池の端ふ幡ひ友路といふ老翁あり翁ハ浜田侯の叔父なり
ゝゝ多安樂ふいきて憂患をたゝ〳〵ひ朝暮業事をもつゝ〳〵或ハ遊藝の
世ふ名をとゝめを集めゝ〳〵ゝ日を消をるのたをけとなり〳〵ぬ津を川検校
こそ 三絃の古代なりの事細佐心流市川流ゝ二流ゝ別を名を古流芸ゝ津を川ハゝ
作ゝ〳〵ゝ習ひ伝ゝ〳〵三世ゝ〳〵ゝ今名人ゝ〳〵世の名ゝ所ゝ所ゝ赤坂溜路ふ住して
八十八歳ふして老ふ来りゝ右て手も又ゝ〳〵ゝ絃り合ハゝ手三絃ふ志溜きを感して
なりゝのゝ事を三国敷ハ又或ハ付絃り白申若勘三郎芝居三絃の元祖
拝意勘三郎といふ〳〵ゝのハ我元祖の佐心検校ゝ中ゝ勘三郎先祖賓家
中城東中橋ゝ芝居能優奥ゝ世〳〵ゝ
大樹家のゝ〳〵ゝ猿若彩ゝ古敷といふ事を勤ゝ拝屋勘之郎ゝ
たりゝゝて佐心検校ふ七陌獅子といふ秘曲を習ひ伝ゝ〳〵ゝ
ゝゝれハ今芸人ゝ〳〵ゝ若いまゝ年若〳〵ゝ

藝ふ志深き四ふ世の人を伶人並扶持する人間ふ及ぶ事朝暮夕陽志ぢしの
方々なかりき物ふ伶人と云事も若かりし時分に古代の音階たとひよ
く熟知とも今樂ふ用ふることを思ひ出るも甚だ教ふ隨ひ
ゐび並に斗ふ寄ふ近き次中村伶九郎平ふ召に参り止宿して行うと
古代藝術乃事に及ぶ打うち先祖勅三郎實永中
上覧ふ付申若彩多古敷の事をもりく永祿永樂通寶の後之又百貫文中
給りしゐと伶ふ次ふ七郎獅子といふもの今い和ふ事ものもゐく歌かい
しきなどを伶ふを思ひ出て平が先年拾校律を用ふ伶ふり事を云出ぬ
伶九郎悦び涙ぞさしば誠ふ奇ん人と云事ふ家門意法郎彼是列座
して各奇異の思ひを抱を伶九郎主ふ獅子の不伝平も涙ふ和ふつか
ゐく思ひゐぐ深ぞふ身振是養まぞふ芽合を合せ主伶九郎も平を
感歎志ふ不見涙を催ふ事法郎けうたんして曲を教へて後世ふ
のこせと所ふも理りゐり思ふ平も又年老ふ事を考へ事ものぬと思ふ

伶ふ〜勅三郎も世事を感〜ふ申若彩多古敷乃一巻を持ち帰て我一家の
ふた伶人ふ火災の恐を考きゐ〜も行くふを平ふ考ふも写〜とゐ〜と云
ふ程せて筆をとり〜ぬ世不伝勅三郎伶九郎世が者たり〜又七郎獅子の
深ぞふ考ふ事ものなくば古実ふ絶ふ伶ふ歌ふ是を思ひて書
伶事の音と七郎獅子乃古義と合せて是を考ふ事を獅子の曲ふい
ふて伝国安幸法郎今子氏ふの女ふ教強〜並伝ふ〜に尾ふ伝ふ〜ふ事を
伶人ふ深〜所ふも藝乃深切を感じて発奮を不絶して是を行ふ
為ふ永井の伝ふ〜三絃の達人ふて世に廣く心ざ〜厚く〜て曲を伶人
ふ平も元年朝暮夕陽志びの分ゐんびを塔を後ふ〜き筆ふいまに
もかゐみの一ふりとゐまを不絶を考ふ

明和巳酉秋

原武吉夫

行年七拾壱歳

此一笑の序に思ひよりし自他の狂言に

我が年の程より藝はあきらし あぢのはくのは藝の中油ひぞ
三絃ハなかしりのあり おちかたをうくらかひてうまきを たしつう船
あまたきうかひたてをころハうかりねより あひちり深べし
をきうしと志むろハ油がよすうしとまやきとまがふ あと知るべし
らうひりのかがつるむきなどと思ひすぎ志づらふかうて りうまさそれ
はやりりてきれいハよろし 達者むき好しく行りてさまし 外をある
志ゆらむきを志ゆ紀事など 百遠志ゆきふ行で むとりかけぶに
うがきき会るはきへいて 内のちりよもきがゆへ むつちりハあし
むうえ志兇くけあんより沸しあんど むえるきバ志きうらくある
あどむゆうしうかれるときは おうかをよ於ふあして八うまむとりの
ををしの経ちがひ氣をつけてすうし かけぞえ お庭りし せよ
もかをむふとあて いろ思へふもふハあらんにかりされふぞ あるる

些人ハ大勢持までも内によく 些人ハむとり好みをぞ
大勢の中で むとりを自高し 強る人をバ皆すてふせよ
聞人をみな素人と申ずんをあいうある人へ きらんをびうし
よるゆるはつうかたけ 極ふききてしる處もきめくうる人あし
紀藝もるもに入がく 紀をのあきバ人をそしるに かんえん甚よ紀
あぢまひと好ろびつきあじこま油でと 藝をバやめて身を楽しませよ
世ふ志ろうとらふとていふ事なるあらひてらろうといふものなる
あるべし 藝の善悪沙汰をよしての名ふハ行るにも人の身分を
さしてのことぞあり
志從ふとてらろうとて身ハ藝をどもらろうとのへて藝ハ志ろうと
志ろうといふ人とも藝の功者なる身ハ志ろうとに藝ハらろうと
今の世ハ處でもよきものあかりあし いいきあれのハよみよきあり

尚付の藝者ふ對〳〵

藝の名こゝろふ志〳〵つゝの後厚きを見まゝ捨もいつゝこゝに

原氏盛和

かきをゝも佐のかゝみとなゝ紫の形〳〵志ゝ比ゝ名ふ〳〵とも見よ

岡安一統系圖

元祖

岡安四郎三郎

日郎三郎世子
名人
岡安小四郎

小日郎世子 日郎三郎 小日郎 改名取
岡安小三郎
後南浦改

日
彩町名ゝ実名西村九兵衛
岡安良州

日
岡安新次郎

日
岡安源助

日
岡安藤九郎

小三郎世子素人
実名石野恢
岡安南柳

同
素人実名原武右衛
岡安原冨

同
実名古人桂谷孫十郎
岡安扇朝

同
岡安二泉

同
岡安庄次郎

同
岡安半次郎

同
岡安寿南

同
南柳井子
弐代目
岡安小三郎

同
素人
賀茂高鳥敬九
弐代目
岡安南浦

同
実名弓忠実彼
岡安南露

代々成ハ当安行基ノ苗字儀ヲ以テ写ニ成ル

手許儀数年岡安流三味線執ル慶格別出精ニ付世襲苗字ヲ

ヤハリ以来猥ニ苗字相称儀ニ成ル故ニ仍免状如件

同

岡安加称

同

岡安幸次郎

原富中子後南柳中子

同

岡安喜十郎

同

同

岡安源三郎 李教事

源三郎中子後南柳中子

岡安文次郎

文次郎中子

岡安如為

同

岡安吉左衛

寛政三辛亥年十一月九日

園安小三郎門弟

園安南柳判

文久三亥年十月廿九日一校了

活東子

明治二十二年仲春

筆者

妻木頼德